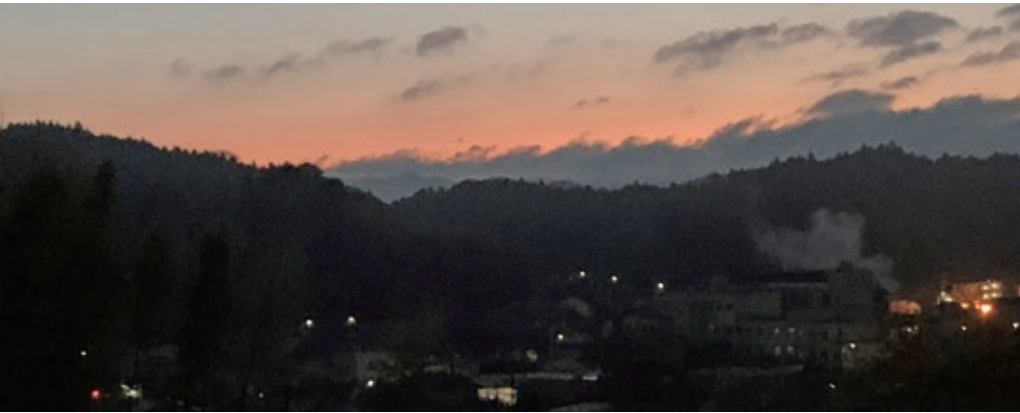


「過去5年で一番良く観えた」主催者感慨深く



東の空に広がり始めた「かぎろひ」現象＝11日午前6時15分ごろ、宇陀市大宇陀中庄のかぎろひの丘万葉公園で

第50回かぎろひを観る会

県内外から150人参加

50回の節目を迎えた宇陀市観光協会主催の「かぎろひを観る会」が11日早朝、宇陀市大宇陀中庄の「かぎろひの丘万葉公園」で開かれた。県内外から訪れた約150人の参加者らは、東の空からうつすらと赤みを帯びた陽光が山上に広がり始めると、その瞬間を感慨深げに見入った。

同会は、持統6(692)年初冬、万葉歌人柿本人麻呂が軽皇子(後の文武天皇)の阿騎野での狩りに随

行。「ひむがしの野にかぎろひの立つみえて かえりみすれば 月かたぶきぬ」(万葉集巻1の48)と詠んだとされる、陰暦の11月17日に毎年行われている行事。

かぎろひは、日の出の1時間ほど前から段階的に色合いを変化して現れる陽光の空のこと。第50回ということもあって本来の昨年12月20日とは別に、冷え込みの厳しさともにかぎろひが現れやすくなる2月11日の祝日に実施することになった。

人麻呂が詠んだ「ひむがしの野に…」の歌は、今まさに沈もうとしている月を軽皇子の父・草壁皇子に、上る太陽を軽皇子に例えたと言われ、輪廻転生・魂の復活を感じさせてくれる壮大な一首。ただ、実際には「かぎろひ」と月を同時に観れる機会はなかなか訪れないらしい。

この日は天候にも恵まれ、協会員らは午前5時前に公園内中央のかがり火を点火。公園に通ずる

階段を次々と上ってくる見物客を笑顔で出迎えた。

その中を古代衣装に身を包み、人麻呂に扮した金剛一智宇陀市長は「この会の1回目は、昭和47(1972)年に開催された。協会関係者、観光ボランティアアガイド、かぎろひファンの力で、宇陀市を代表する大きな催しに育てていただいた。今年は壬申の乱(672年)から1350年の年。大海人皇子が吉野から、この阿騎野の地を通って東国の方へ行かれたということ、で、ゆかりの地でもある。かぎろひを観ようという皆さんの気持ちを一つにまとめて、かぎろひを待ちたい」と声を弾ませながらあいさつした。

しばらくの間、参加者らは奈良芸術短期大学非常勤講師の玉城一枝さんの話を聞き、人麻呂を偲びながらかぎろひの「出番」を待った。この後、午前6時15分ぐらいに東の空が少しずつ明るくなり、赤みを帯びて広がり始めると、参加者らはめいめ

この日、第15回かぎろひ短歌入賞作品集の入賞者の発表も行われた。受賞作品と作者名は次の通り。敬称略。

【かぎろひ賞】「晩秋の阿騎野の里に鳴く野鹿皇子も聞きしか旅寝の丘で」木下瑞子(宇陀市)

【入選】「人麿を熱く讀えし茂吉翁その心も阿騎の野に立つ」横幕吉勝(愛知県愛西市)▼「人麻呂の眺めし空の変わらずに永久にかぎろひ立てよと祈る」山田公子(北海道・北湯)大西そに(宇陀市)

【佳作】「黒門と漆喰(しつくい)壁がよく映えて重伝建のベンガラ格子」中村宗一(御所市)▼「ほのぼのと陽光ゆらぐ山並よいまむらさきに明けゆかむかな」増田笑子(三重県名張市)▼「草風(くさじらみ)かき分けゆけば月斗の碑亡き父は弟子かぎろひを詠む」前尾幸一(大阪市)▼「手土産にあきの味は数あれど叔父の好物桜の葛湯」大西そに(宇陀市)

柿本人麻呂の歌「ひむがしの野に…」に参加者酔いしれる



古代衣装で柿本人麻呂に扮してあいさつする金剛一智宇陀市長



かぎろひの丘万葉公園内にある柿本人麻呂の歌碑



かがり火にあたりながら「かぎろひ」が出るのを待つ参加者



参加者を前に、柿本人麻呂の人物像や時代背景について話をする奈良芸術短期大学非常勤講師の玉城一枝さん



感動のそばに、いつも。